

紹介

日本神話

肥後和男著

記紀の神代卷に記された神々の事蹟を以て日本神話と名づけることは、今日に於ては最も常識的な見解となつてゐるが、人は然るか呼ぶことによつて通常それをば人が未だ正しい歴史を書くことの出来なかつた太古の時代の想像的物語として、いはゞ歴史の外にあるもの、如く解してゐる。併しながらわが國の神話は決して單に上古のみあつたものではなく、むしろあらゆる時代にその基底としてあり、それを動かす原動力として常に歴史の内に生きはたらいてゐるのである。神の代は人の代のはじめであると共に、またその範型と考へられ、人は常にそれを仰ぎ、それに則つて行爲する。神話の中には後の歴史の發展がすべて約束せられてあり、それ故に後代の歴史はまた悉く神話の註釋であるとも解せられる。——今日普通に所謂神話學なるものが若しも神話をば單に作られたものとしてこれを歴史から切離し専ら他の諸民族の神話と比較對照することをのみ事とするものであるとするならば、それとは別に神話をはたらくものとしてこれを歴史の中に見る、

言換へれば神話の規範性を明かにするところの立場がなければならぬ。

「叢」に「日本神話研究」古代傳承研究の二著によつてわが國の神話に對する歴史の民俗學的研究とも稱すべき獨自の新なる立場を明かにせられた肥後和男氏は、この度その立場を更に徹底せしめ、一層明白なる自覺を以て改めて日本神話全般に關する概論を試みられるに至つた。

惟ふに、神話に關するかやうな解釋は必ずしも著者のはじめて創唱するところとのみいふことは出来ないであらうが、本書に於いては何よりもかやうな考へ方が首尾一貫してあり、著者の神話觀がよく日本神話の全體に照徹してゐることをその第一の特徴としてゐる。論理の一貫は往々にして論旨の平板、解釋の一面性を結果するものであるが、著者の豊富な識見と捕はれざる思索とはよくその危險から遠ざかることをえしめてゐる。即ち著者はたゞ抽象的に神話の規範性を論ずるのでもなく、また専ら後代に於けるその影響といふやうな點を問題とするのでもなく、あくまで日本神話そのものに即して、いはゞ逐條的にその意味を解釋して行きながら、然も全體としてそこに認められる日本神話の精神ともいふべきものを解明してゐるのである。

それは例へばかの「日本神話研究」に收められた「賀茂傳説考」に見ると同じ行き方であつて、小冊子なるが爲にかれに於けるが如き詳論は望まれないが、至るところ極めて示唆に富む創見に満されてゐる。この點がまた近時多く見るところの日本精神論や國體

論と相違する點であつて本書の第二の特徴ともいふことが出来る。かくの如きは確に日本神話に親炙すること永く、また日本歴史に對する深い洞察を有する著者の如きにはじめてよくするところであると思ふ。

叙述極めて平明にして、行文些の澁滞なく、一氣に全編を讀了することが出来る。獨り専門歴史家のみならず博く一般國民の教養の爲に推奨すべき近來の好著といふべきであらう。(四六版二〇〇頁、昭和十五年十二月 弘文堂發行、定價一、二〇)(柴田實)

日本上代の武器

末永雅雄 著

戦争は歴史を作る。歴史は又戦争に依つて展開される。人生の歴史から闘争が驅逐さるゝ日は永遠に來ないであらう。人類物質文化史の一部門を研究する考古學に取つて、武器の研究が重要な位置を占むるのは、蓋し當然でなければならぬ。

本書は我が上代の武器中の攻撃武器に就いて、其の資料を蒐集しこれを種々の角度から考察したものであつて、昭和九年同じ著者の世に送つた『日本上代の甲冑』の姉妹篇をなし我が上代武器に關する攻防兩面よりする研究の一翼をなすものとする。さて三百十頁に渉る其の叙述は前後兩篇に分たれて前篇は主として武器そのものの持つ歴史性と其の性格を概観したものであり、後篇は右の武器に就いての型態學的研究並びに之が考説を試みてゐる。い

まその内容の一斑を擧げると前篇は一、總論 二、日本上代武器の推移 三、日本上代文化と武器なる三章から成つて、總論に於いては「時代の科學と文化とは常に武器の上に顯現せられ」……「武器は人類文化開拓のための最も有力なる援助者であつた」とする武器の本質論から發して「その具有せる實際戰鬥上に現される性能の發揮にもとづきこれに對する依倚と信頼とは遂に轉じて武器に對する「信仰」といふ一形態をとつて現れ出づるに至つた」としてそれに日本武器のもつ精神的性格に觸れ、我が上代社會に於いて、武器が如何に信仰的なものであつたかの實際を文献上より交證してゐる。而して著者は又其の記述に於いて武器の發展を常に先史時代からの經過として見てゐる點が擧げられる。第二章に見ゆる考察は、最もよくそれを表はしたものと云ふ可く、日本武器の黎明を繩紋式文化期に置いて其の石器中石刀、石劍、石棒、など何れも武器としての性質をもつものであるとなし、後篇に於いて、これらの形式が古墳時代の我が國に固有と考へらるゝ頭椎大刀に傳へられたとする獨自な見解を導いてゐるのである。なほ此の第二章では考古學的遺物のうち、多少とも武器に關聯を有する遺物類はつとめて蒐集圖示の上論述してゐる。それはひとり石器、骨器、金屬器たるに止まらない。腐朽し易い木製品に對しても近時發見されし漆の弓などにも及んで、そこに資料集たるの意味をも兼ねしめてゐることが注意せられる。

こゝで著者がまた其の敘述に於いて武器の推移を他の考古學的遺物から窺ひ得る日本文化全體の特殊な流れを辿つて理解しよう